

まとめ 浮かび上がった日本の論点

京大シンポジウム 第2部
「CNの主要風力、太陽光、水素は2030年、2050年に
どう臨むか」

2021年12月10日

京都大学大学院経済学研究科 特任教授

山家公雄

2030年・2050年目標実現に向けて

- 2030年目標は妥当なるも野心的 CN出遅れのツケ
 - ・課題と対策は明白：自立速度、系統、規制、市場機能
社会受容性、RE100への対応
 - *太陽光：FIT出だし好調なるも政策的な抑制と受容性問題で足元は苦境（cf.バイオマス）
 - *風力：環境アセス等で大きく出遅れ 漸く世界常識の土俵に
- 2050年目標は曖昧（多くの選択肢） グリーンと言えるか不透明
 - ・再エネ業界は2050年CN目標が未作成
 - ・世界動向を見据えて責任・決意→8割削減目標の早期上方修正
サプライチェーン整備、コストダウン、多様な価値発揮
潜在力発揮（自家消費・PPA、沖合洋上）

「水素は国家戦略」の認識不足

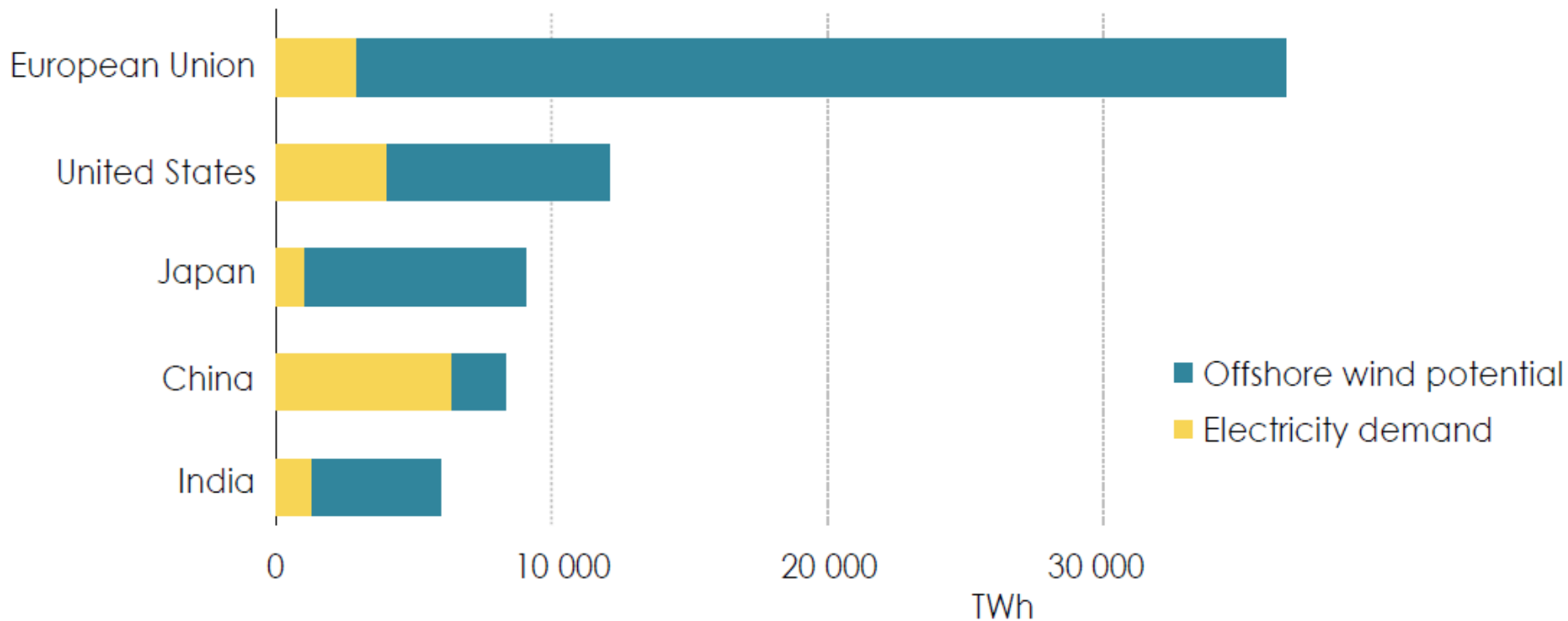
- CNへの真剣味・進捗はEUに劣る(次頁参照)
- 電力(エネルギー)周回遅れだけでなく水素も遅れ・ガラパゴス化の懸念
 - ⇒ 発想の転換 EUモデル(世界標準)は日本に有利
「豊富な国産再エネ資源を利用してエネルギー自立、戦略産業化」
 - ⇒ 主役は風力・太陽光を主とする再エネとグリーン水素
流通インフラを含め積極的な(成長)投資を
ブリッジテクノロジー(ブルー)の投資回収に要留意

CNの考え方比較: EU (IEA) vs 日本

項目	EU (IEA)	日本
脱炭素の手順: 同一	電力(電化)⇒熱・燃料・材、電力⇒水素(化合物)・バイオ	
クリーンの考え方	グリーン(再エネ由来)	ブルー(CCUS)も
ブリッジテクノロジー (ブルー)の期間	10年(2030年)	30年超(2050年)
水素の位置付け	戦略産業 取引支援策具体化	曖昧、脱炭素の技術
生産	グリーン 不足分輸入 近い	ブルーも 多くを輸入 遠い
国際協力 (地政学転換対応)	政府主導	主に民間対応
流通	系統、水素PL、合成ガスPL	(系統) 海上輸送 (G導管)
利用	産業、運輸	発電の役割大

洋上風力の潜在量と2018年需要量

日本の洋上風力の潜在力は電力需要の10倍



シンポジウムへのご参加
ありがとうございました。